

す な た う ば ぬ ま い せ き
砂 田 姥 沼 遺 跡
(C区)

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区
土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 20 年 1 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近は、小河川による低地に刻まれた低位台地が南北に広がっています。この微高地は近年の開発により、従来からの農村風景がその姿を次第に失いつつあります。しかしその反面、この地に展開する大規模な遺跡群は、記録保存のための発掘調査により、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して存在していることが確認されています。

今回、株式会社ジャパンビバレッジの施設建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、関係機関との協議のうえ、記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面におきまして広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 20 年 1 月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤 文雄

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市砂田町（東谷・中島土地区画整理事業地 51 街区 2 画地）に所在する砂田姥沼遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、独立行政法人 都市再生機構埼玉地域支社による東谷・中島地区土地区画整備事業に伴う事前調査として、発掘調査から整理・報告書刊行に至るまで業務を同機構より委託を受けて、宇都宮市教育委員会の指導のもと、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合が平成 19 年度に実施したものである。
3. 図版 1 に掲載したラジコンヘリコプターによる空中撮影は、株式会社スカイサーベイに依頼して実施した。
4. 本報告書の編集は、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合 調査研究員 白崎智隆が担当した。執筆の分担については第 3 章第 3 節に記載した。
5. 発掘調査、資料整理及び報告書作成の過程で各方面から賜った御協力については、本文中の第 3 章第 3 節に記載した。
6. 調査に係わる図面・写真等の諸記録及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1	第4章 遺構と遺物	10
第1節 調査の概要	1	第1節 概要	10
(1) 調査に至る経緯	1	第2節 竪穴住居跡	10
(2) 本調査の経過	1	第3節 土坑	12
(3) 整理作業の経過	1	第4節 溝	14
第2節 調査体制	2	第5節 ビット群	19
第2章 遺跡の環境	5	第6節 その他	24
第1節 地理的環境	5	(1) 旧河川跡	24
第2節 歴史的環境	5	(2) 遺構外出土遺物	24
第3章 調査方法	7	第5章 まとめ	25
第1節 発掘作業	7		
第2節 整理作業	8		
第3節 報告書作成作業	9		

挿図目次

図1 本調査範囲と周辺地形	2	図8 1号溝・2号溝	16
図2 遺構配置図	3～4	図9 3号溝・旧河川跡及び出土遺物	17～18
図3 遺跡の位置と周辺遺跡	6	図10 ビット群①・ビット群③	20
図4 グリッド設定図	7	図11 ビット群②	21
図5 1号竪穴住居跡及び出土遺物	11	図12 ビット群④	22
図6 2号竪穴住居跡・ 3号竪穴住居跡及び出土遺物	13	図13 ビット群⑤	23
図7 1号土坑～5号土坑	15	図14 遺構外出土遺物	24

表目次

表1 遺構番号新旧対照表	9	表3 出土遺物観察表	27
表2 遺構一覧表	27	表4 ビット計測表	28

図版目次

図版1 A区調査区全景	
図版2 1号竪穴住居跡, 2号竪穴住居跡	
図版3 3号竪穴住居跡, 1号土坑～5号土坑, 1号溝	
図版4 1号溝～3号溝	
図版5 旧河川跡, ビット群③, B区調査区全景, 作業風景, 調査前風景	
図版6 1号竪穴住居跡出土遺物	
図版7 2号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡・旧河川跡出土遺物, 遺構外出土遺物	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

(1) 調査に至る経緯

平成19年7月、独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社より、埋蔵文化財発掘調査支援共同組合（以下埋文協）へ、栃木県宇都宮市東谷・中島地区51街区2画地における埋蔵文化財発掘調査委託業務に係わる見積り依頼があった。

当該地は、施工業者大和ハウス工業株式会社が平成19年5月23日に行った試掘調査により発見された埋蔵文化財包蔵地であり、堅穴住居跡3軒、土坑4基、掘立柱建物跡1棟、溝5条、ピットなどが確認されている。

開発計画の内容は、事業地の南側に浸透槽を設置し、北側に建物を建設する予定であった。共に切土工事をするため、その範囲における埋蔵文化財発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

都市再生機構、宇都宮市教育委員会、株式会社ジャパンビバレッジと大和ハウス工業株式会社との協議の結果、本調査範囲は①基礎施工に伴う掘削範囲及びその工事の際の余掘り範囲を含めた建物建設部分（A区）、②浸透槽設置範囲（B区）の2地区が対象となった。調査対象面積は、両地区合わせて1,350㎡である。

平成19年7月17日に都市再生機構と埋文協との間で委託契約を締結し、平成19年7月21日より本調査を開始した。

(2) 本調査の経過

事業範囲内の上物撤去は、平成19年7月19日までに施工業者によって終了し、7月21日に埋文協によって基準点測量、調査範囲の設定作業に着手した。7月23日より機材の搬入、設営を行うとともに、調査区南側の浸透槽設置範囲（B区）の重機による表土掘削を開始した。それに伴い、鋤簾を用いた人力による遺構の検出作業に努めた。

南側の浸透槽範囲（B区）については、7月26日に遺構の検出を終えた。8月2日に遺構平面図・土層断面図などの測量作業及び写真撮影を実施した。8月4日までに調査区の埋め戻しを終了し、原状を復帰した。

一方、北側の建物建設範囲（A区）については、8月3日に重機による表土掘削を完了し、8月9日まで遺構の平面確認作業を実施した。その後、検出した遺構の精査作業へ移行し、8月20日に完了した。なお、記録保存に伴う測量作業及び写真撮影はこれに並行して行った。8月22日にラジコンヘリによる空中撮影を実施し、宇都宮市教育委員会の立ち会いのもと調査終了確認を行った。同日中に機材の搬出・撤収作業等を行い、翌23日に記録保存のための調査メモ及び一部の写真撮影などの補完作業を行い、発掘作業を終了した。

(3) 整理作業の経過

整理作業のうち、遺構の図面については埋文協北関東整理事務所（栃木支部：株式会社真和技研）で原図を作成した。その他の諸記録及び遺物については埋文協西関東整理事務所（山梨支部：昭和測量株式会社峡東支店内）で実施した。

出土遺物量は、整理箱（内寸：545×336×150mm）3箱であった。整理作業の工程は次の通り。

【遺物の移送（8/23）・水洗（8/27～8/28）・注記（8/29～9/4）・分類（9/5）・接合（9/6～10/5）・復元（9/18～10/17）・実測（10/1～19）・トレース（10/18～10/26）・写真撮影（10/29）】

以上の作業と並行して、写真整理・台帳浄書を行い、栃木支部の図面整理作業の完了を受けて、報告書編集作業を行い、印刷所に入稿した。

第2節 調査体制

調査は宇都宮市教育委員会が指導し、埋文協が実施した。発掘作業補助員は、発掘調査の経験を有する者を近隣地域から募集し、10名が従事した。整理作業は、西関東整理事務所（山梨支部：昭和測量株式会社岐阜支店内）で雇用する4名が従事した。

以下に、調査担当者及び関係者名を掲げる。

調査担当者：岩崎祥（調査主任：埋文協調査研究員）、白崎智隆（整理作業のみ：埋文協調査研究員）

測量担当者：上野高嗣（真和技研）、石井豊（真和技研）、杉山務（真和技研）

補助員：飯島征夫、石崎正則、大滝安良、小貫宏、大福地時治、小池正昭、直井恵子、沼子和子、野沢勇、吉沢正（以上発掘作業）、小幡浩子、高田和子、立花重光、栃原好美（以上整理作業）

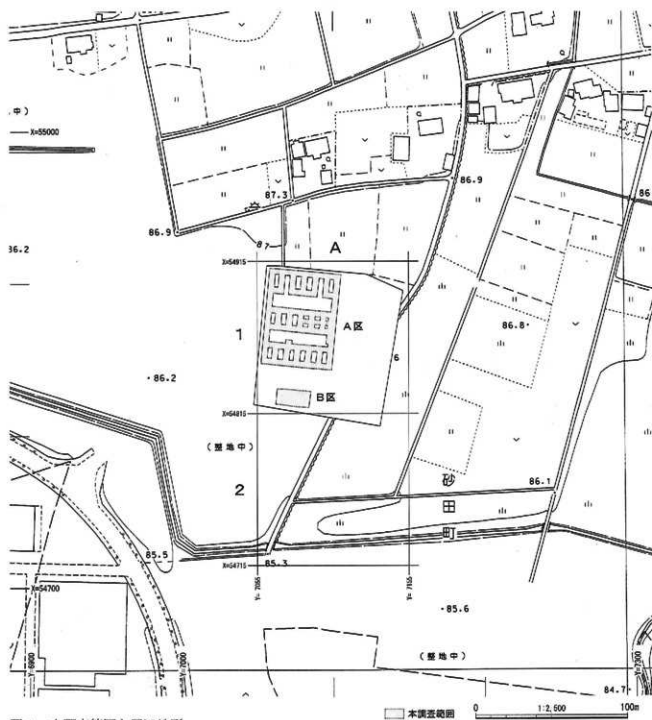


図1 本調査範囲と周辺地形

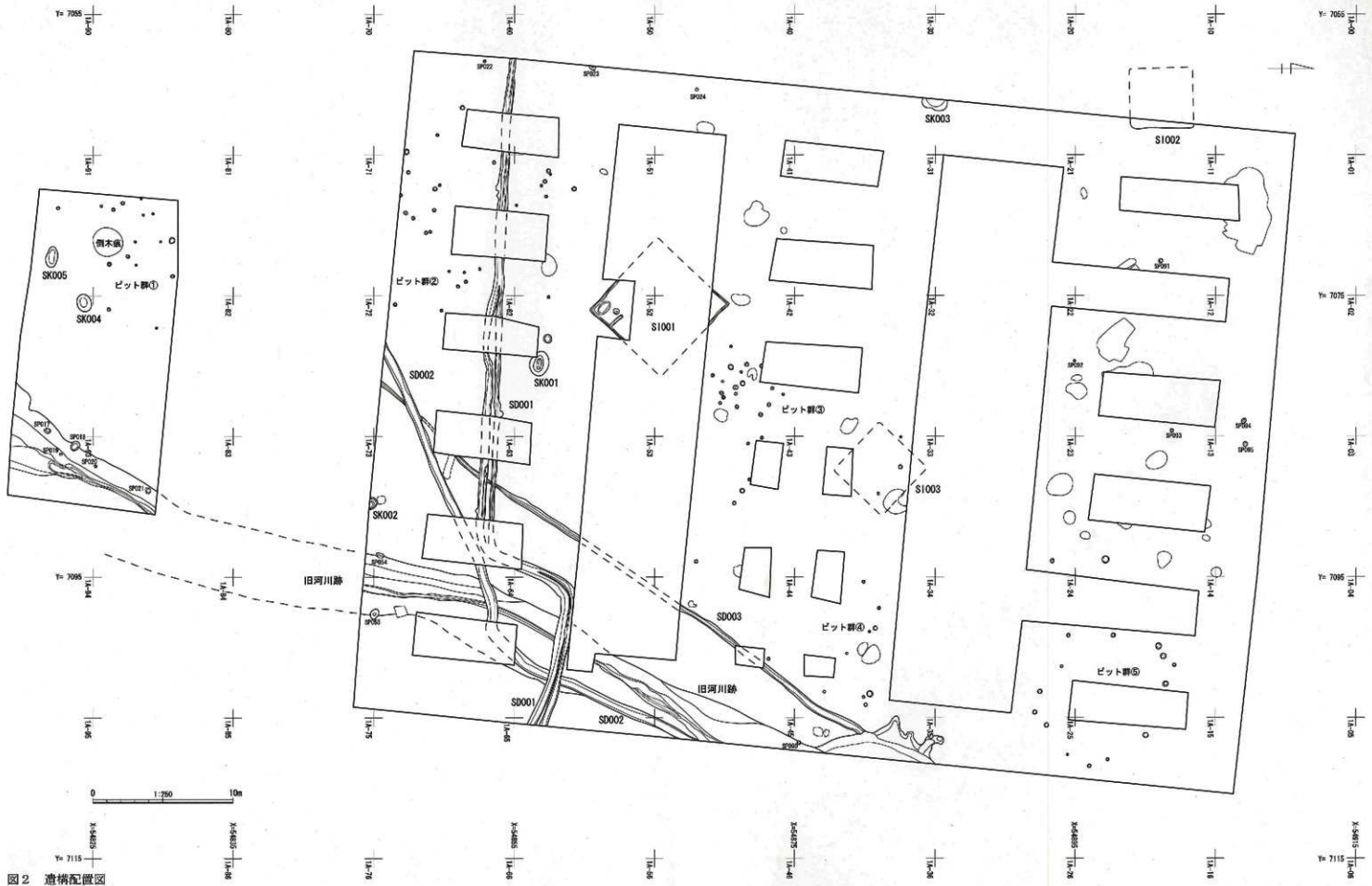


図2 遺構配置図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

独立行政法人都市再生機構の実施する東谷・中島地区土地区画整理事業地内の諸遺跡は「東谷・中島地区遺跡群」と総称されており、砂田埜沼遺跡はこの東谷・中島地区遺跡群の北東部に位置している。本遺跡の総面積は16,400㎡であり、本報告に係わる調査地点は遺跡範囲の北西端にあたる。

本遺跡は新4号国道の西側、JR宇都宮駅から南南東へ約6.5km、北関東自動車道宇都宮上三川ICから北へ約1kmに位置し、約2.5km西には田川、約4km東には鬼怒川がそれぞれ南流する。両河川により形成された河岸段丘は、西側が田原・願成寺台地、東側が岡本・磯岡台地と称されており、前者より後者の標高が高い。両者の比高は約1～2mである。この南北に細長く展開する田原・願成寺台地上の西側縁辺部に遺跡は立地する。遺構確認面の標高は約86mである。

本遺跡が展開する台地上はほぼ平坦な地形であるが、厳密には北側から南側に向かってやや低くなる緩斜面を呈している。遺跡周辺ではこうした台地の平坦面を利用して、水田や畑地が広がっている。調査区周辺も現況は荒蕪地であったが、従来は水田や畑地として利用されていたことがわかっている。

近年は、北関東自動車道路の都賀町～上三川町区間が開通し、新4号国道へ合流する宇都宮上三川ICが設置されたことにより、宇都宮市街地と遠隔地とを中継する交通の要衝となった。さらに、東谷・中島地区整備事業に伴い、商業施設や流通業務施設、工場などの建設が進み、遺跡をとりまく環境の変化は著しい。

第2節 歴史的環境

砂田埜沼遺跡の周辺には、南北に延びる地形に沿って数多くの遺跡が存在する。特に、東谷・中島地区遺跡群で主体を成す古墳時代以降は遺跡数が急増し、古墳時代及び奈良・平安時代には下野国の中心地域の一つであったと考えられている。ここでは、本遺跡で確認された縄文時代と古墳時代を中心に、周辺の状況について述べることにする。

縄文時代

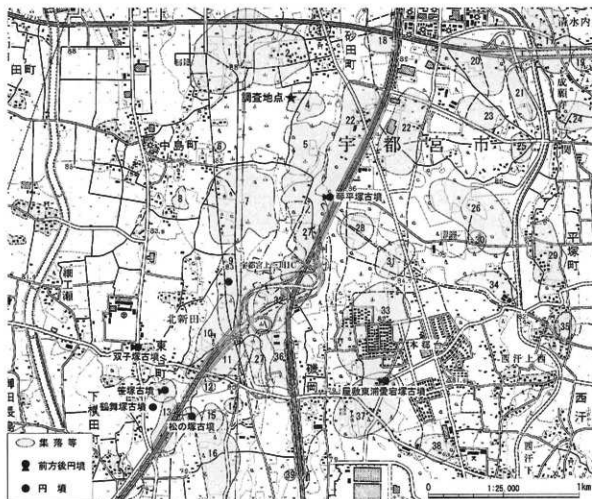
縄文時代の遺跡は大規模な集落は少ないものの、ほぼ全時期を通じて認められる。

草創期は27 磯岡北遺跡や仏沼遺跡、大町遺跡で遺物が出土しているが、遺構は確認されていない。わずかに、22 西羽郡西原遺跡で覆土の特徴から草創期と考えられる陥とし穴状土坑が見つかったのみである。早期・前期になり遺物を出土する遺跡数は増加するものの、遺構を確認した遺跡は少ない。中期は遺構が認められる遺跡も増え、石川坪遺跡や島田遺跡、根本遺跡などでは多くの竪穴住居跡が確認され、比較的規模の大きな集落であったと考えられている。後期は遺跡数に大きな変化はないが、再び遺構の確認例が減る。しかし、石川坪遺跡や殿山遺跡、粕内遺跡では多量の遺物が出土していることから、集落の存在が想定されている。晩期は遺跡数が減少し、遺構を確認した遺跡も少ない。後期から引き続き、石川坪遺跡で多量の遺物が出土している。

古墳時代

前期の遺跡は分布域が限られているが、中期に入り遺跡数が大幅に増え、田原・願成寺台地を中心に大規模な集落が展開する。4 砂田埜沼遺跡をはじめ、1 砂田遺跡、3 砂田東遺跡、7 立野遺跡、10 権現山遺跡、11 原遺跡、32 杉村遺跡、36 磯岡遺跡などで多くの竪穴住居跡が確認されている。

また中期を特徴づける大型前方後円墳として、本遺跡の南西約2kmの場所に笹塚古墳が存在する。笹塚古



- | | | | | |
|----------|-----------|------------|------------|--------------|
| 1 砂田遺跡 | 9 榎橋古墳 | 17 願成寺遺跡 | 25 後尚塚遺跡 | 33 西赤塚遺跡 |
| 2 砂田尾遺跡 | 10 権現山遺跡 | 18 上横田A遺跡 | 26 小原原高塚群 | 34 下小屋原遺跡 |
| 3 砂田東遺跡 | 11 原遺跡 | 19 成願寺遺跡 | 27 磯岡北遺跡 | 35 南浦遺跡 |
| 4 砂田尾沼遺跡 | 12 原古墳群 | 20 大岡台遺跡 | 28 百沼遺跡 | 36 磯岡遺跡 |
| 5 中島笹塚遺跡 | 13 百目鬼遺跡 | 21 小原原遺跡 | 29 平塚原根岸遺跡 | 37 磯岡・西汗の古墳群 |
| 6 赤沢高塚群 | 14 車塚古墳群 | 22 西戸部西原遺跡 | 30 不動堂遺跡 | 38 西赤塚東遺跡 |
| 7 立野遺跡 | 15 権現塚古墳群 | 23 中道遺跡 | 31 内野遺跡 | 39 磯岡B遺跡 |
| 8 茅内遺跡 | 16 上石日遺跡 | 24 榎戸遺跡 | 32 杉村遺跡 | |

図3 遺跡の位置及び周辺遺跡

墳は後円部径63m、後円部高10.5m、前方部幅48m、前方部高9m、全長約100mを測り、5世紀前半では県内最大の前方後円墳である。墳丘規模から水系を超えた広域的支配を行った首長による築造と考えられている。

後期には、田原・願成寺台地で前代から継続してさらに遺跡数が増加し、東側の岡本・磯岡台地遺跡へと分布範囲が拡大する。比較的規模の大きな集落としては、1 砂田遺跡、7 立野遺跡、11 原遺跡、19 成願寺遺跡、32 杉村遺跡、33 西赤塚遺跡、36 磯岡遺跡などが存在する。

大型前方後円墳の分布は、中期に中心であった本地域から、より南方の妻川と思川が合流する栃木市や小山市周辺へと移行し、小山市摩利支天塚古墳(墳長115m、5世紀後半～6世紀初頭)、琵琶塚古墳(墳長123m、6世紀前半)、吾妻岩屋古墳(墳長84.7m、6世紀後半)などが築造される。しかし、本地域での古墳数が減少するわけではなく、琴平塚古墳など多くの古墳の築造が継続される。

第3章 調査方法

第1節 発掘作業

調査区の範囲設定

使用した座標は、周辺の埋蔵文化財調査の成果との整合性を図るため、日本測地系第IX系に基づいている。

まず、 $X=54,915 \cdot Y=7,055$ を起点として、事業計画範囲を網羅する $X=54,715 \sim 54,915 \cdot Y=7,055 \sim 7,155$ の範囲内に一辺 100m の大方眼を設定し、東西方向は西から A, B, 南北方向は北から 1, 2 の順に記号・番号を付した (図 1 参照)。

さらに、その大方眼内を 10m 単位の小方眼に区画し、北西隅を起点として 00~99 までの番号を付した (図 2 参照)。検出した各遺構の位置等はこの方眼番号を用いて示している。

表土の掘削

表土掘削作業は、重機を用いて行った。宇都宮市教育委員会が立会いのもと、確認調査の結果を参考に株式会社水渾土建が掘削作業に従事した。使用した重機は、表土掘削に 0.4 m³ バックホウ 1 台、掘削に伴う発生土の運搬に 4 t ダンプトラック及び 3.5t クローラダンプを使用した。

表土掘削による発生土は調査区東側の事業範囲内に仮置きした。なお、仮置きした発生土の流失及び飛散防止のためブルドーザーにより適宜整地・転圧作業を実施した。

調査後の開発工事の都合から、調査区南側の浸透槽設置範囲 (B 区) より着手し、その後北側の建物建設範囲 (A 区) の掘削へと移行した。なお、A 区は建物建設に伴い切り土掘削をする範囲のみの発掘調査のため、建設工事において掘削を行わない部分は島状に残す方法で表土掘削を行った。

また、重機による表土除去と並行して、適宜人力による遺構確認作業を実施した。

遺構の発掘

遺構番号は、遺構の種類毎に略記号で区分し、検出した順に番号を付した。

平面形態を確認した遺構は、土層観察畦を設定し、遺構内に伴う遺物に留意しながら土層の堆積状況を観察しつつ精査を行った。重複関係にある遺構は、平面形態を確認した段階で新旧関係が判明するものについても同様に土層観察畦を設定し、再度確認しつつ遺構の精査を行った。

また、1号整穴住居跡は当初その一部のみの検出であり、遺構の性格が特定できないことから、宇都宮市教育委員会指導のもと調査範囲を北側へ一部拡張して調査を実施した。旧河川跡は、精査に伴い一部湧水する状況であったため水中ポンプを用いて排水を行いながら調査を実施した。

遺構・遺物の表記

各遺構に付した記号・番号は、遺構を示す S に続けて種別を示す英字記号と検出順を示すものである。遺構の種別を示す記号については、基本的に独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所で用いられる表記に準拠した。本書で使用した表記は次の通りである。

S I…整穴住居跡, S K…土坑, S D…溝, S P…ピット

遺構検出中に出土した遺物は、遺構毎に出土順に番号を付した。ただし、覆土中の小破片については各遺構一括出土遺物として表記した。

	10m									
10m	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
	10	11								
	20		22							
	30			33						
	40				44					
	50					55				
	60						66			
	70							77		
	80								88	
	90									99

図 4 グリッド配置図

測量および遺構の実測

発掘作業に先立って、調査範囲杭の打設及び基準点測量を行った。調査範囲は、施工業者側より提示された外構計画図の図面を用いて、浸透槽設置範囲と建設切り土範囲に余掘範囲 2m を加味した調査範囲を再生機構及び市教育委員会確認のもと設定した。基準点及び水準点については、再生機構を通じて国土交通省及び宇都宮市が設置する水準点網の座標測量成果により、2級の精度を維持した。

表土除去後、調査区内に任意の測量杭を4箇所打設し、各杭に座標値・標高値を与えて測量を実施した。

遺構平面図・遺物出土位置図の作成には、トータルステーションを用いて座標上に展開した。土層断面図についてもトータルステーションを使用した。成果は測量編集ソフトウェアでDXF形式ファイルに変換して出力した。

測量および遺構実測に使用した器材・ソフトウェアは以下のとおりである。

現場測量器材：トータルステーション（4級A）Nikon-Trimble GF-203

編集ソフトウェア：BLUETORENDO V ver. 4

写真撮影

発掘調査中は、中判カメラ（モノクローム）と35mm判カメラ（カラーリバーサル・モノクローム）を中心にそれぞれ撮影し、その他にデジタルカメラを補助的に使用して記録保存に努めた。撮影に使用したフィルムは、中判、35mmともにFUJIFILM NEOPAN 100 ACROS、FUJIFILM PROVIA 100 Fである。撮影はすべて調査研究員が行い、使用した器材は以下のとおりである。

MAMIYA RB-67（使用レンズ：65mm、127mm）、Nikon F80（使用レンズ24mm～85mm）

Canon IXY DIGITAL 5.0 MEGAPIXELS

また、調査終盤に実施した空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに依頼した。撮影には、以下の器材を使用した。

ラジコンヘリコプター：エアスキッパーE改

カメラ：HASSELBLAD SWCE（レンズ：38mm）

第2節 整理作業

遺物の注記

出土遺物への注記作業は宇都宮市教育委員会の指示により、遺跡名の略称（UTSU-C）と遺構略記号、検出遺構番号を記した。遺物への注記は下例のように行った。

（注記例）砂田地沼遺跡 1号竪穴住居跡出土1番遺物 → UTSU-C SI001 No.1

また、遺物台帳へは出土場所もしくは出土地点、出土した標高及び遺物取り上げ年月日を記載した。

遺物の接合・復元

分類・注記が完了した遺物は、本来の形状を復元できる資料を中心に接合・復元作業を実施した。接合にはセメダインCを使用し、欠損部の充填には 樹新成田総社製品のパイサムを用いた。

遺物の実測・トレース

実測は全て手測りでを行い、原図をスキャナーで取り込み、コンピュータによるデジタルトレースを行った。

写真の整理

モノクロームフィルムは、中判・35mm判ともに密着プリントと併せてネガアルバムに保存し、情景毎に説明を付した。カラーリバーサルフィルムは、すべて駒仕上げとし、遺構毎にシートに分けてスライドファイルに収納した。また、それぞれの写真台帳を作成した。

第3節 報告書作成作業

遺構番号について

本書中の遺構番号は発掘調査時に付した番号を基本としたが、報告書の作成にあたり、一部に変更、欠番が生じた。変更については、表1に示した。

執筆作業

報告書の作成に関わる執筆と全体編集は、埋蔵文化財発掘調査支援協同組合 西関東整理事務所（山梨支部：昭和測量株式会社峡東支店内）で行った。本文の執筆は第3章を岩崎祥が、それ以外を白崎智隆が行った。また、挿図・表・図版の作成、遺物の写真撮影及び報告書全体の編集は白崎が担当した。

なお執筆にあたって、永井智教、水野順敏（五十音順）から御教示を賜った。記して謝意を表したい。

図の作成

遺跡測量図・遺構実測図は、埋文協北関東整理事務所（栃木支部：株式会社真和技研）が作成した DXF 形式ファイルを編集し、既存の地形図及び遺物実測図は、スキャナーで取込んだ EPS 形式ファイルを編集して原稿とした。

既存の地形図は、縮尺 1/25,000 及び 1/2,500 図を使用し、図 1・2 は以下を用いて作成した。

図 1 宇都宮市発行 1/2,500 都市計画図「IX-IE 11-4」（平成 11 年測量，平成 16 年修正）

図 2 国土地理院発行 1/25,000 地形図「宇都宮東」（NJ-54-30-1-2）（平成 14 年 5 月 1 日発行）

国土地理院発行 1/25,000 地形図「上三川」（NJ-54-30-2-1）（平成 15 年 5 月 1 日発行）

各種測量図・実測図の縮尺は以下の通りとした。また、挿図中の尺度にも縮尺を付記した。

遺構：遺構配置図…1/250、堅穴住居跡…1/80、土坑…1/40、溝…1/200（セクション図…1/60）、ピット群…1/80

出土遺物：土師器…1/4、須恵器…1/4（断面黒塗り・拓本は表/断面/裏の順に掲載）、石器…1/2、礫…1/4
遺跡周辺地形図ならびに出土遺物実測図には、以下の箇所に網かけを用いた。

図 1 本調査範囲と周辺地形図 … 本調査範囲

図 3 遺跡の位置及び周辺遺跡 … 遺跡範囲

遺物実測図 … 土師器の黒色処理部分

編集には、以下のソフトウェアを使用した。

Photoshop Ver.6.0 (ADOBE) , Illustrator Ver.10.0 (ADOBE)

表 1 遺構番号新旧対象表

掲載番号	←	調査時番号	掲載番号	←	調査時番号
・SI001	←	・SI001	・SK001	←	・SK001
・SI002	←	・SI002	・SK002	←	・SK002
・SI003	←	・SI003	・SK003	←	・SK003
・SD001	←	・SD002	・SK004	←	仮SK001
・SD002	←	・SD003	・SK005	←	仮SK002
・SD003	←	・SD004	・覆乱	←	・SK004
・旧河川跡	←	・SD001	・覆乱	←	・SK005

第4章 遺構と遺物

第1節 概要

調査により検出した遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑5基、溝3条、ピット111口である。このほかに、調査区東側で旧河川跡を検出した。

調査区周辺は以前に水田として利用されており、区画整理や道路造成時に削平された後、客土が行われていた。特に、調査区北側では現地表面から1.4m程盛土されており、一部で削平に伴い遺構が消滅した範囲もみられた。このため遺構の遺存状態は悪く、覆土も薄い状況であった。また、調査区A区は建物基礎敷設範囲のみの調査であったため、竪穴住居跡などはいずれも部分的な検出にとどまり、遺構全体の把握には至らなかった。

第2節 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(S1001) (図5, 図版2・6)

1A-41・1A-42・1A-51・1A-52で検出した。当初、住居跡の南隅と北隅を検出したのみであったが、宇都宮市教育委員会の指示により調査区の一部を拡張し、遺構内容の把握に努めた。

形態と規模

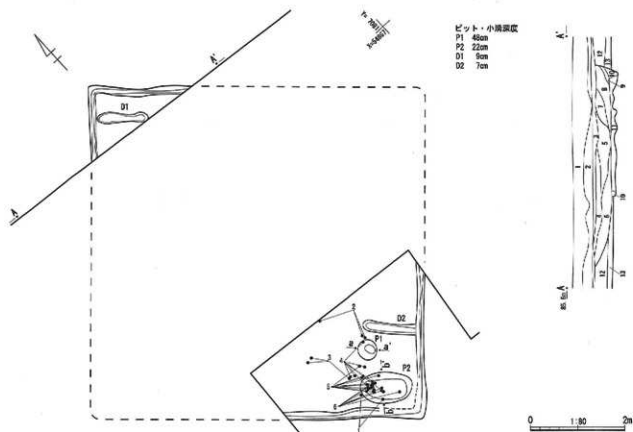
平面形態は正方形を呈し、規模は北西-南東方向で6.9m、南西-北東方向で7.1mと推定した。カマドが検出できなかったため主軸方位は明確ではなかったが、小溝の検出状況や周辺の調査事例からカマドが北東壁中央に構築されていたと仮定し、N42Eと考えた。

確認面から床面までは2~3cmの深さで、壁は削平によりほとんど検出できなかった。また、床面の硬化は調査範囲内では認められなかった。周溝は南隅部分が掘り過ぎにより切れてしまっていたが、全周していたと推定した。周溝の幅は14~16cmであった。柱穴は、P1が主柱穴となった可能性があり、44×40cmのほぼ円形であった。P2は貯蔵穴であり、住居跡南隅に構築されていた。主軸方向は南西壁とほぼ平行し、長軸110cm、短軸66cmであった。また、北西壁・南東壁に直交するように間仕切り状の小溝を2条検出した。規模はD1が長さ108cm、幅26cm、D2が長さ112cm、幅22cmであった。

出土遺物

出土したのは土師器坏・高坏・壺・甕で、器種が豊富であった。覆土の厚さが薄かったため、貯蔵穴からの出土が大半を占めた。出土量は決して多くなかったが復元できた個体が多く、6個体を図示した。住居跡北隅での遺物の出土は認められなかった。

土師器坏(1)は丸底で口縁部が外反する器形であり、丁寧にミガキが施される。器表面は内外面とも剥離が著しいが、これは被熱によるものと思われる。土師器坏(2)は体部外面に稜を有し、口縁部がやや外傾する。須恵器坏蓋の模倣坏と考えられる。口唇部が内削ぎ状に面取りされており、これは北武蔵地域を中心に分布する坏に見られる特徴である。土師器高坏(3)は胎土が軟質で、器表面の摩滅が著しい。小片のため図示できなかったが、胎土の特徴から同一個体と考えられる破片の中に、脚部と思われるものが認められた。土師器坏(2)及び土師器高坏(3)は、共に床面直上からの出土である。土師器壺(4)は、遺存部分が少ないため鉢や小型甕の可能性も考えたが、外面にミガキが施されるなどの諸特徴から壺と推定した。外面の丁寧な調整に比べ、内面の整形はやや雑な印象を受ける。土師器甕(5)は底部の大半を欠損する。器形や、胴部に縦位のミガキを施すなどの特徴から甕と考えた。ただし、甕の内面を黒色処理する例は、周



ビット・小溝調査
 P1 48cm
 P2 22cm
 D1 9cm
 D2 7cm

0 1:80 2m

1号壁穴住居跡 (S1001) 土層説明

1. 暗褐色土 赤褐色をわずかに含有。客土。
2. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含有。下部に鉄分粒を含有。
3. 黄褐色土 炭化した鉄分粒を多量に含有。
4. 暗褐色土 炭化物粒を多量に含有。
5. 暗褐色土 炭化物粒を多量。ローム粒を少量含有。
6. 黄褐色土 炭化物塊。暗褐色土が基底。
7. 暗褐色土 ローム粒を炭化。砂を多量に含有。
8. 暗褐色土 ローム粒を多量に含有。
9. 暗褐色土 ローム粒を少量含有。
10. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含有。(真鍮)
11. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを含有。暗褐色土基底。(磁方)
12. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含有。
13. 黄褐色土 ローム土状。赤褐色及び黄褐色軽石粒を含有。

貯蔵穴 (P2) 土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒・黄褐色軽石粒を含有。
2. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
3. 黄褐色土 ローム土状。暗褐色土が覆じる。

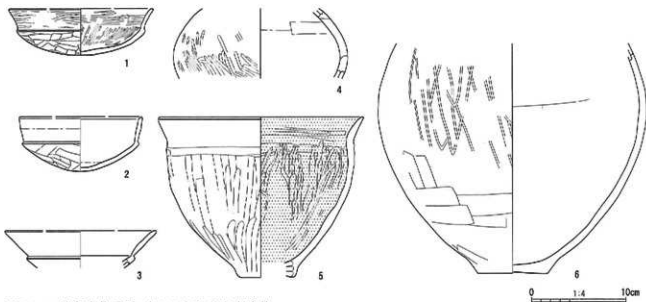


図5 1号壁穴住居跡 (S1001) 及び出土遺物

辺地域を含めほとんど認められないため注意が必要である。黒色処理は炭素吸着によるものであり、底部は単孔と考えられる。土師器甕(6)は貯蔵穴(P2)から出土した。口縁部から頸部にかけて欠損し、胴部下半部外面には煤がわずかに付着している。出土した破片は全て細かく、平均して3~4cmほどの大きさである。意図的に壊され、廃棄された可能性が高い。

2号竪穴住居跡(S1002)(図6, 図版2・7)

1A-10で、東壁付近の一部のみを検出した。住居跡のほとんどが調査区外で、不明な点が多かった。

形態と規模

平面形態は正方形を呈したと思われ、検出した東壁は一辺4.5mであった。主軸方位は明確ではなかったが、竈が北壁中央に構築されていたと仮定し、N11Wと考えた。

床面を既に確認面で検出した状況であり、壁は削平によりほとんど検出できなかった。また、床面の硬化はみられず、柱穴も確認できなかった。ただし、周溝については、調査区壁の土層断面観察により確認できたため、本来は壁下を巡っていたものと推測できた。

出土遺物

床面直上から4点の礫が1ヶ所からまとまって出土した。使用痕のない自然石であり、やや小振りではあるが形態の特徴などから、磯岡遺跡(初山・塚原他1999)や杉村遺跡(藤田・安藤2000)などこの地域の遺跡に多くみられる、いわゆる編物石と考えられる。

3号竪穴住居跡(S1003)(図6, 図版3・7)

1A-33で検出した。住居跡を壊している攪乱の堆積土中に焼土が混じていたため、周辺を精査したところ、調査区壁で住居跡の立ち上がりを確認した。遺構はほぼ削平された状態であった。

形態と規模

形態・規模とも削平により不明であった。しかし、主柱穴と考えたP1・P2の位置などから、その規模や形態は、S1002とほぼ同規模の一辺約4.5mの正方形と推測した。また、調査区壁で確認された竈の痕跡から推測し、主軸方位はほぼN44Eと考えた。

床面及び壁は確認面で完全に削平されていた。周溝は調査区壁の土層観察により確認できたことから、本来は四壁下を全周していたと考えられた。P1、P2を主柱穴と推定したが、P3は住居跡に属するかどうか明確にできなかった。規模はP1が30×30cm、P2が23×19cm、P3が14×14cmであった。竈も削平により消滅していたため形態等については不明だが、調査区壁で構築材と思われる砂質土や焼土が確認できたことから、北東壁中央部に構築されていたと推測した。

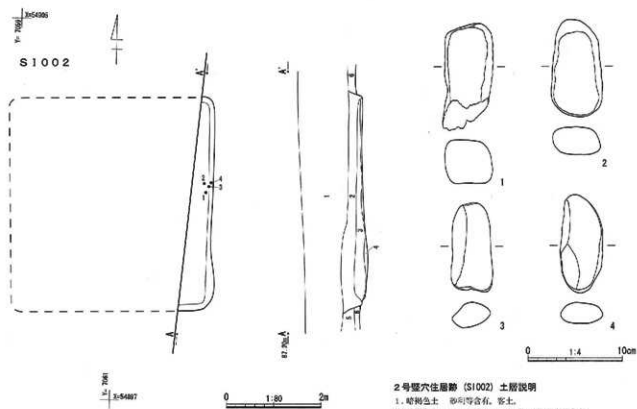
出土遺物

土師器杯や甕の小片が数点出土したのみであった。全て住居跡を壊す攪乱土中からの出土で、これらの遺物は3号竪穴住居跡に伴うと考えられたため、住居跡の遺物として扱った。土師器杯2点を図示した。

第3節 土坑

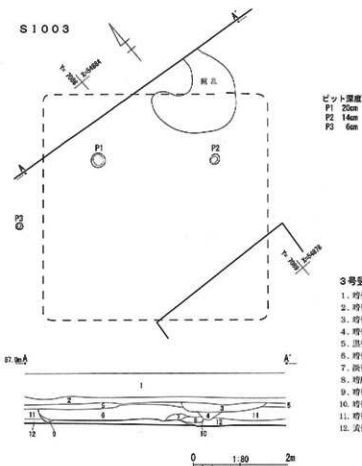
1号土坑(SK001)(図7・図版3)

1A-52で検出した。楕円形を呈し、長軸は176cm、短軸は137cm、深さは42cmであった。主軸方位はN83Wであった。底面では直径15~20cm、深さ約20cmのピットを3口検出した。覆土は単層で、堅くしまりがあり、赤褐色及び黄灰色軽石粒が多量に含まれた暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。



2号竪穴住居跡 (S1002) 土層説明

1. 暗褐色土 砂引等含有。客土。
2. 暗褐色土 ローム殻・コムブロックを少量含有。
3. 暗褐色土 ローム殻・コムブロックを多量含有。(掘削)
4. 暗褐色土 ローム殻・コムブロックを中量含有。(掘削)
5. 暗褐色土 ローム殻・コムブロックを少量含有。
6. 灰褐色土 ローム主体。赤褐色及び黄褐色礫石類を含有。



ピット深さ
P1 20cm
P2 14cm
P3 6cm

3号竪穴住居跡 (S1003) 土層説明

1. 暗褐色土 砂引等含有。客土。
2. 暗褐色土 ローム殻をわずかに含有。下層に細分粒含有。
3. 暗褐色土 ロームブロック・ローム殻を多量に含有。瓦割木炭。
4. 暗褐色土 ロームブロック・ローム殻を少量に含有。瓦割木炭。
5. 黒褐色土 炭化した炭粉粒を多量に含有。
6. 暗褐色土 ローム殻をわずかに含有。
7. 灰褐色土 赤土塊を中量含有。灰色砂と暗褐色土が混在。
8. 暗褐色土 灰褐色土塊、黄土塊を多量に含有。カマド焼結材が。
9. 暗褐色土 ローム殻・ロームブロックを少量含有。(掘削)
10. 暗褐色土 黄土塊を微量。ローム殻・ロームブロックを含有。
11. 暗褐色土 ローム殻・ロームブロックを少量含有。
12. 灰褐色土 ローム主体。赤褐色及び黄褐色礫石類を含有。

図6 2号竪穴住居跡 (S1002)・3号竪穴住居跡 (S1003) 及び出土遺物

2号土坑(SK002) (図7・図版3)

1A-63・1A-73で検出した。形態は円形と推定したが、調査できたのは遺構のほぼ半分だったため、明確にはできなかった。検出した部分での最大長は86cmで、深さは29cmであった。覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

3号土坑(SK003) (図7・図版3)

1A-20・1A-30で検出した。形態は、不整形だが方形を呈していたと考えた。調査できたのは遺構のほぼ半分であり、検出した部分での最大長は172cmで、深さは52cmであった。覆土に焼土粒を含んでいたため、遺構の性格を判断するには注意を要する。遺物は出土しなかった。

4号土坑(SK004) (図7・図版3)

1A-91・1A-92に位置し、形態は楕円形を呈していた。長軸は122cm、短軸は100cm、深さは29cm、主軸方位はN76Eであった。SK001と似た、赤褐色及び黄灰色軽石粒を多量に含んだしまりの強い覆土であった。遺物は出土しなかった。

5号土坑(SK005) (図7・図版3)

1A-91に位置し、形態は長楕円形を呈していた。長軸は132cm、短軸は73cm、深さは21cm、主軸方位はN87Eであった。SK004と同じく、赤褐色及び黄灰色軽石粒を多量に含んだしまりの強い覆土であった。遺物は出土しなかった。

第4節 溝

1号溝(SD001A・B) (図8・図版3～4)

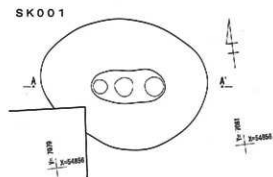
1A-60～65で検出した。長さは80m、幅は40～60cm、深さは20～30cmであった。東西に延び、調査区を横断するが、1A-63から1A-64付近で鉤の手状に屈曲していた。断面形態は逆台形で、壁はやや外に開きながら、直線的に立ち上がっていた。SD002、SD003、旧河川跡と重複したが、全ての遺構より新しかった。

SD001は、ほぼ同じ位置に作られた2条の溝で構成されていた。当初は2条で一組の遺構かと思われたが、堆積土層の断面観察から新旧関係を把握できたので、先に構築された方をSD001A、後に掘り直された方をSD001Bと呼称した。調査区西端部の土層観察では、溝は完全に1条であり、切り合い関係は認められなかった。1A-61付近までは溝が1条のように見えたが、土層の断面観察から2条の溝がほぼ重なり合っていたことがわかった。1A-62付近から2条に分かれ、SD001Aが北側、SD001Bが南側に位置しながらほぼ平行して構築されていたが、屈曲する辺りで交叉し、SD001Aが南側、SD001Bが北側に位置を入れ替えていた。

出土遺物は全くなかったが、SD001Bの底面に径4～5cmの木杭が約1m間隔で垂直に設置されていた。木杭の先端は加工されていなかったが、現場の所見では埋め込まれたというよりは、打ち込まれたものようであった。

2号溝(SD002) (図8・図版4)

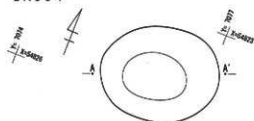
1A-44・1A-54・1A-62～64で検出した。調査区内で確認できた部分の長さは32m、幅は55～80cm、深さは35～45cmであった。1A-64付近で西に約40°屈曲していた。断面形態は逆台形であり、壁はほぼ垂直に立ち



SK002



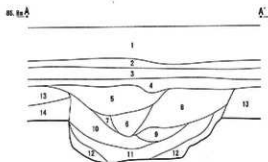
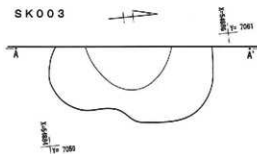
SK004



4号土坑 (SK004) 土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含有、赤褐色及び黄褐色軽石粒を多量に含有。
2. 黄褐色土 ローム粒を多量、ロームブロックを少量含有。
3. 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含有。

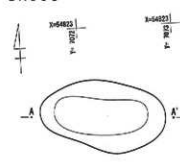
SK003



3号土坑 (SK003) 土層説明

1. 暗褐色土 赤粒を含有。密土。
2. 暗褐色土 密土以外の黄土。
3. 暗褐色土 粘性があり、灰色を帯びる。
4. 暗褐色土 粒化した炭分粒を多量に含有。
5. 暗褐色土 ローム粒を微量に含有。
6. 暗褐色土 ローム粒を少量含有。
7. 暗褐色土 ローム粒を多量に含有。
8. 暗褐色土 灰色ブロック土を多量に含有。
9. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含有。
10. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含有。
11. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量含有。
12. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック(大)を多量に含有。
13. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含有。
14. 黄褐色土 ローム主体、赤褐色及び黄褐色軽石粒を含有。

SK005



5号土坑 (SK005) 土層説明

1. 暗褐色土 ローム液及び中粒を少量、赤褐色及び黄褐色軽石粒を多量に含有。
2. 黄褐色土 ローム液を多量、ロームブロックを少量含有。
3. 明褐色土 ローム液・ロームブロックを少量含有。

図7 1号～5号土坑 (SK001～SK005)

0 1:40 1m

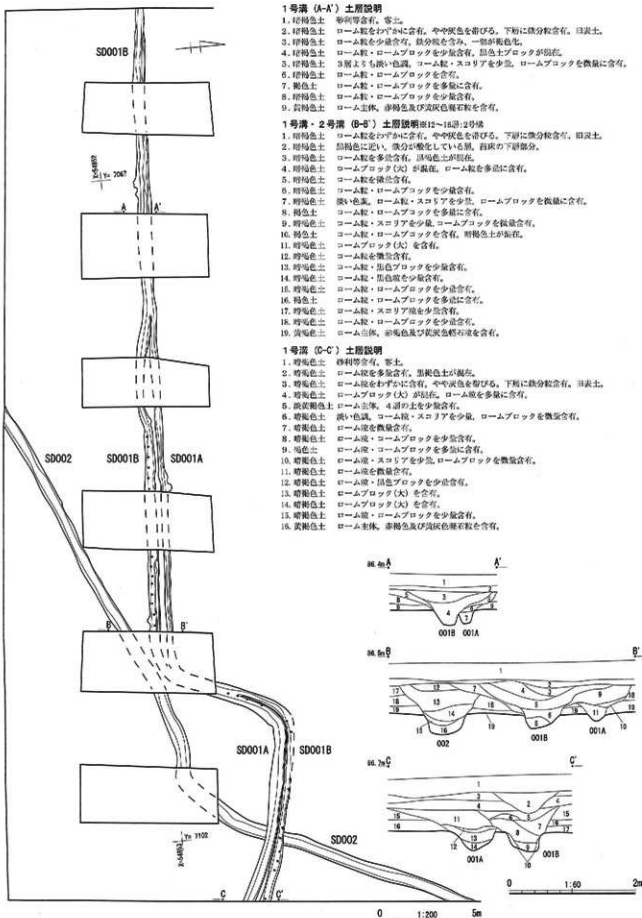
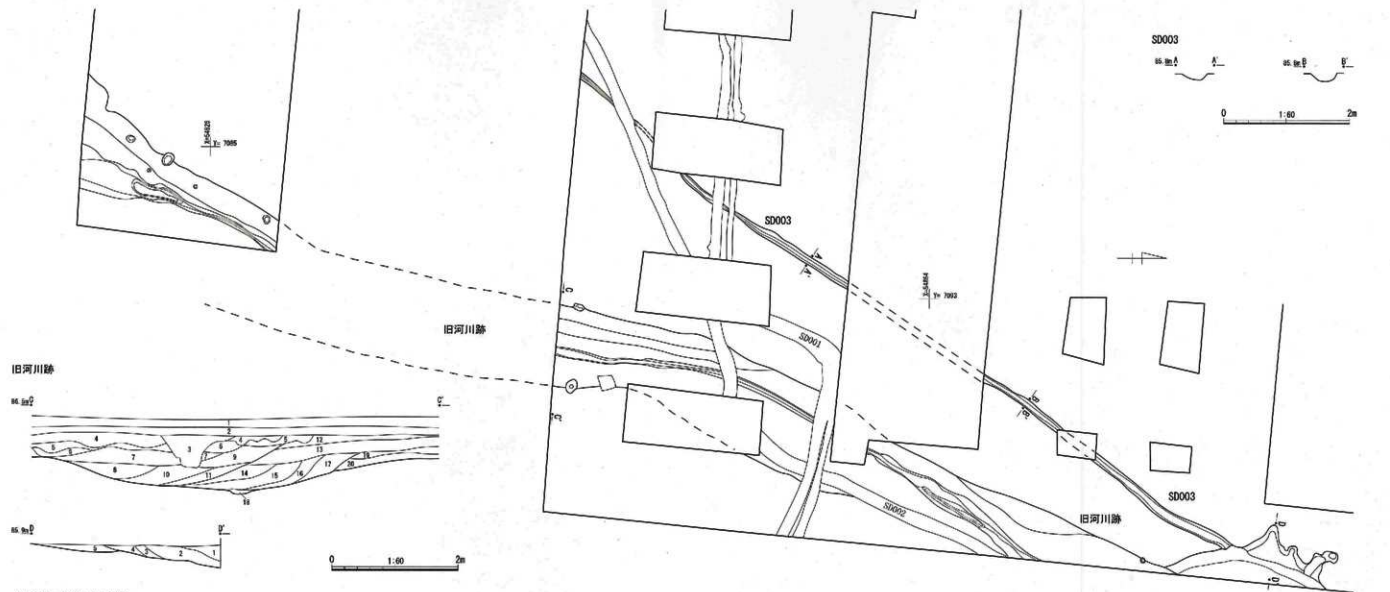


図8 1号溝 (SD001A・B)・2号溝 (SD002)

※SD001Bの中のドット「・」は木杭の検出位置を表す。

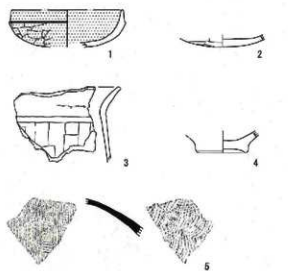


旧河川跡 (0-0) 土層説明

1. 礫層土 礫が不含有。単1。
2. 礫砂土 礫土が礫の表土。
3. 礫砂土 少量の礫を含有。
4. 礫砂土 ローム状を含有。
5. 礫砂土 礫が少なく含有。一部に灰色シルトを含有。
6. 礫状砂質土 褐色砂を含有。
7. 礫状砂質土 褐色砂及び灰色シルトをマーブル状に含有。鉄分粒を少量含有。
8. 礫状砂質土 褐色砂、灰色シルトを礫に混在に含有。
9. 礫状砂質土 褐色砂、灰色シルトを少量含有。7層の土層に属す。
10. 礫状砂質土 礫層土上、灰色シルト・褐色砂・灰色砂がマーブル状に混在。
11. 褐色砂 灰色砂を礫に混在に含有。
12. 礫層土 上下層との間接はややの厚膜。13層の土が属す。
13. 礫層土 礫分粒を少量含有。礫の上層部分に礫の上層に属す。
14. 礫層土 礫分粒を少量含有。少量の礫状砂を礫に混在に含有。
15. 礫状砂質土 礫分粒を少量含有。少量の礫状砂を礫に混在に含有。
16. 礫状砂質土 褐色砂、灰色砂、灰色シルトを礫に混在に含有。
17. 礫状砂質土 ローム状・ロームブロックを少量含有。少量の褐色砂をマーブル状に含有。
18. 礫状砂質土 礫分粒が主体。小円礫を少量。ローム状を少量含有。
19. 礫砂土 ローム状・ロームブロックを少量含有。
20. 礫砂土 ローム主体。礫状色及び礫状色を含有。

旧河川跡 (0-0) 土層説明

1. 礫状砂土 薄い灰色砂を含有。
2. 礫状砂土 ローム状を少量含有。
3. 礫状砂土 ローム状を少量に含有。
4. 礫状砂土 礫状色を少量含有。
5. 礫層土 ローム状を少量含有。



0 1:4 10cm

図9 3号溝 (SD003)・旧河川跡及び出土遺物

上がっていた。SD001, SD003, 旧河川跡と重複していた。新旧関係は SD003・旧河川跡より新しく, SD001より古かった。遺物は出土しなかった。

3号溝(SD003) (図9・図版4)

1A-34・1A-35・1A-44・1A-53・1A-62～63で検出した。調査区内で確認できた部分の長さは42m, 幅は20～65cm, 深さは5～15cmであった。確認面からの深さは南側ほど浅くなっていた。やや蛇行した部分もあったがほぼ直線的に延び, 主軸方向はN35Eであった。断面形態は底面に丸みがある浅い「U」字状で, 壁もゆるやかに立ち上がっていた。SD001, SD002, 旧河川跡と重複したが, 全ての遺構よりも古かった。遺物は出土しなかった。

第5節 ビット群

ビットは全部で111口を検出した。その多くは旧河川跡からやや離れた位置を沿うようにして分布していた。発掘調査時には掘立柱建物跡の存在を想定して調査を行ったが, その検出には至らなかった。ここでは, その分布に偏りがみられた場所をビット群として報告した。

ビット群①(SP001～016) (図10)

調査区B区西側, 1A-81～82・1A-91に分布していた。調査できたのはビット群の一部と考えられ, 16口のビットを確認した。径は20cm前後のものが多く, 深さは5～20cmとばらつきがあった。また, 配置に規則性は認められず, 遺物も出土しなかった。

ビット群②(SP025～053) (図11)

調査区A区南西部, SI001の南西に位置し, 1A-51・1A-60～62に分布していた。ビット群の範囲は南側の調査区外に広がると考えられたが, 29口のビットを検出した。径は20cm前後が多く, 30cmを超えるものも認められた。深さは10cm～30cmとばらつきがあった。配置に規則性はなく, 遺物は出土しなかった。

ビット群③(SP056～078) (図10・図版5)

SI001の北東, SI003の南西に位置し, 1A-42～43にかけて23口のビットを検出した。径は20cm前後が多く, 30cmを超えるものも認められた。深さは5cm～30cmとばらつきがあったが, 20cm以下のものが多かった。配置に規則性は見られなかった。SP070から土師器製の小片が, 1点出土した。

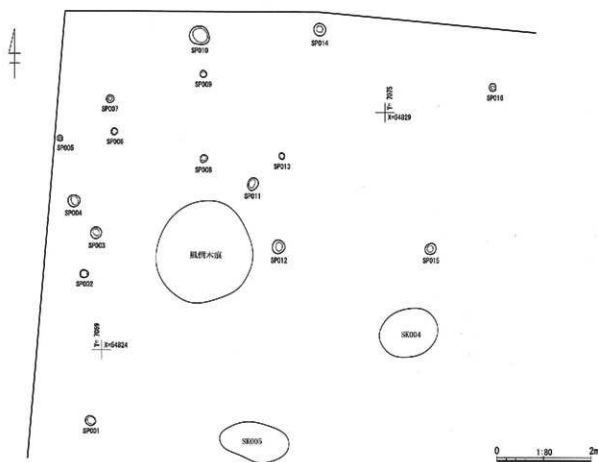
ビット群④(SP079～089) (図12)

SI003の東に位置し, 1A-34・1A-44に分布していた。11口のビットを検出し, 径は15～40cmとばらつきがみられた。深さは5～25cmに収まり, 20cm前後のものが多かった。配置に規則性はなく, 遺物も出土しなかった。

ビット群⑤(SP096～111) (図13)

調査区A区北東部に位置し, 1A-13～15・1A-23～25にかけて分布する16口のビットにより構成されていた。径は30cm前後が多く, 深さは1cm～35cmとばらつきがみられた。ビット群中央が調査区外のため明確ではないが, SP098～111は円形に分布しているようにみえた。縄文時代の堅穴住居跡となる可能性も考慮し

ビット群① (SP001～SP016)



ビット群③ (SP056～SP078)

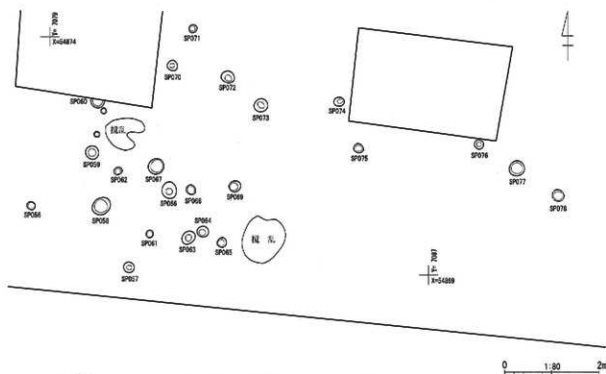


図10 ビット群① (SP001～SP016)・ビット群③ (SP056～SP078)

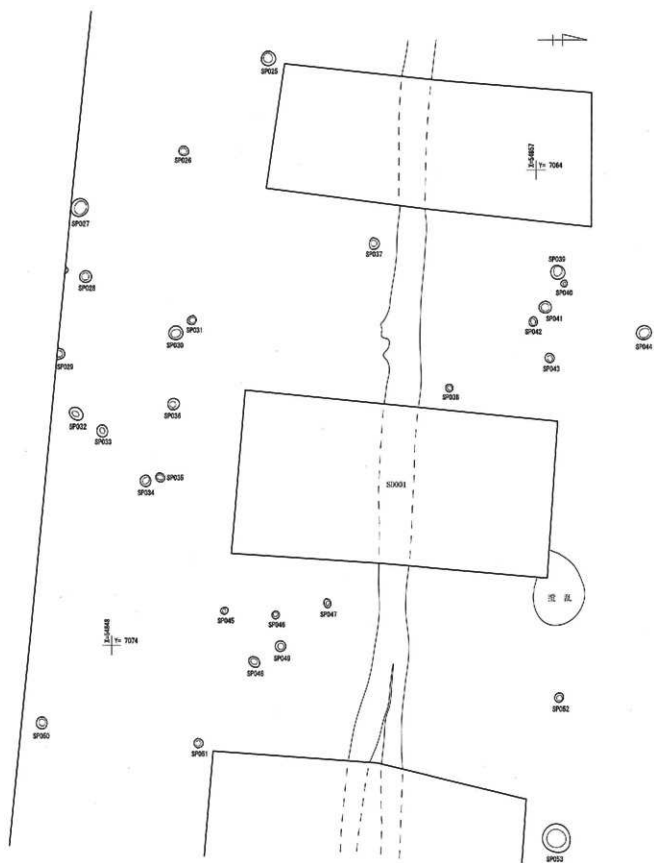


図11 ビット群② (SP025～SP053)

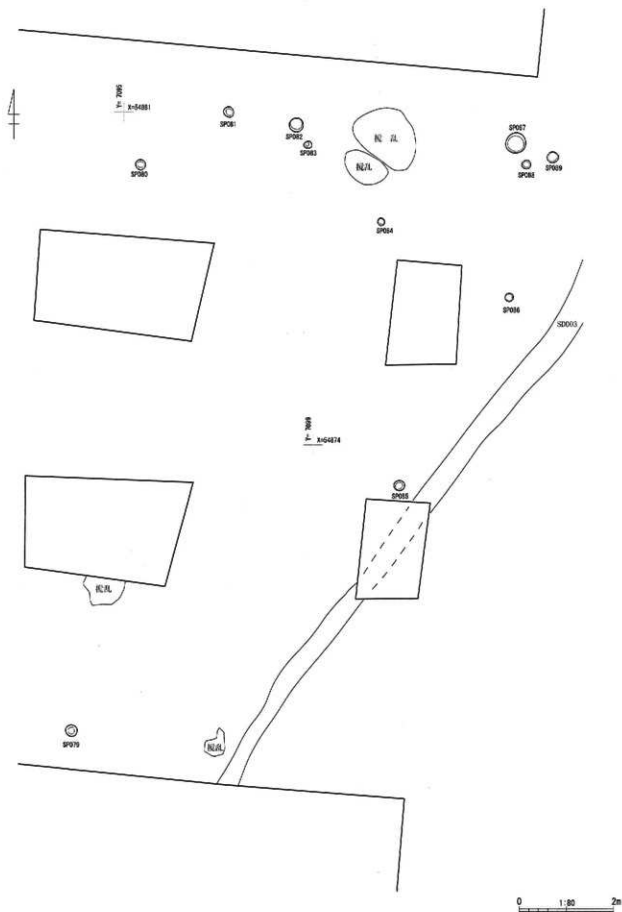


図12 ビット群④ (SP079~SP089)

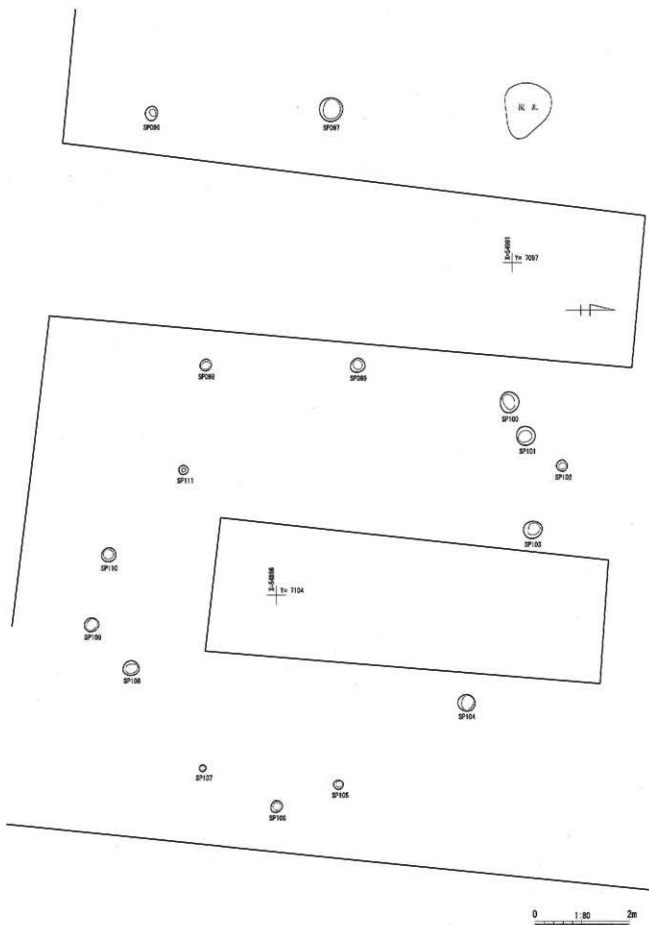


図13 ビット群⑤ (SP096~SP111)

たが、根拠が乏しいためピット群として記載した。遺物は出土しなかった。

第6節 その他

(1) 旧河川跡 (図9・図版5・7)

調査区の東側をかすめるよう南北方向に縦断し、A区～B区にまたがって検出した。当初は、溝として調査を行ったが、砂質土がマーブル状に堆積し、一部の層に葉理が観察できたことなどから、旧河川跡と判断した。

確認面から流路の底までの深さは50cm～70cm、流路の幅は4～5mであった。断面形態は浅い皿状で、壁はゆるやかに立ち上がっていた。SD001・SD002・SD003と重複し、新旧関係はSD003より新しく、SD001・SD002より古かった。また、平面確認ではわかりにくかったが、堆積土層の観察により旧河川跡は新旧2つの流路に分かれることが判明し、新旧の流路はほぼ重なり合いながらゆるやかに蛇行していた。調査区周辺の地形は、わずかではあるが南に向かって傾斜していたことから、流れの方向は北から南であったと推定できた。

遺物は、土師器の坏、甕、甗、須恵器の甕、瓶類の破片が出土した。主に、最下層に堆積する砂層からの出土であった。5点を図示した。

土師器坏(1)は、丸底で口縁部がほぼ直立する器形である。内外面とも漆仕上げによる黒色処理が施されているが、漆の観察ができたのは一部である。(2)は土師器坏の底部破片、(3)は土師器甕の口縁部破片である。(4)はやや上げ底となるが、土師器甕の底部であろう。(5)は小片で器種の特定は困難だが、外面をタタキ整形後カキ目により調整しており、須恵器横瓶となる可能性が高い。

(2) 遺構外出土遺物 (図14・図版7)

縄文時代

縄文時代の遺物は、頁岩製の有舌尖頭器(1)を1点図示した。縄文時代草創期の所産と考えられる。B区1A-82の風倒木痕から出土した。このほかにも、遺構外遺物として小型の剥片(チャート4点、黒曜石1点)が出土したが、図示はできなかった。ただし、これらの剥片が(1)と同時期のものであるかは明確ではない。土器は出土しなかった。

古墳時代

古墳時代の遺物は、須恵器甕の胴部破片(2)を1点図示した。A区の非土で表面採集したものであり、出土位置は不明だが、SI001もしくはSI003に伴う遺物となる可能性がある。



図14 遺構外出土遺物

第5章 まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡3軒、土坑5基、溝3条、ピット111口、旧河川跡を検出した。遺物は古墳時代後期の土師器、須恵器を中心に、縄文時代草創期の有舌尖頭器も1点のみではあるが出土した。以下に各時代の要約を記して、まとめとする。

なお遺構の時期については、その特定が困難であり推測の域を出ないことから、ここで扱うこととした（表2参照）。これは、出土遺物が皆無である遺構が多く、また竪穴住居跡も全て部分的な検出に留まり、出土した遺物が遺構の時期を特定するには充分なものではなかったためである。

縄文時代

草創期の有舌尖頭器が1点出土している。周辺遺跡でも草創期の遺物を確認できた遺跡は、爪形文土器が出土した大町遺跡などわずか3遺跡であることから、今回の調査による大きな成果といえよう。ただし、風倒木痕からの出土であり、遺構などは検出していない。また、有舌尖頭器のほかにも、黒曜石やチャートの剥片が数点出土しているが、全て後世の遺構からの出土であり、時期の特定は難しい。しかし、旧石器時代の遺物は確認できていないため、縄文時代の所産となる可能性は高い。

このほか、土器などの遺物は全く出土していないため、縄文時代と特定できる遺構はない。しかし、1号土坑や4号土坑、5号土坑の覆土はしまりが極めて堅く、地山にみられるものと同様の赤褐色軽石や黄灰色軽石^{*1}を多量に含んでおり、古墳時代以降の遺構とは明らかに異なる覆土が堆積する。このことから、これらの土坑は、縄文時代に属する可能性がある。このほか、数基のピットにも同様の覆土を有するものがみられたが、その配置に規則性はみられなかった。

古墳時代

古墳時代後期の竪穴住居跡を3軒検出した。時期の推定は、周辺遺跡の土器編年を参考に行った。

1号竪穴住居跡は覆土が薄く、重複する遺構も存在しない。このため、時期の異なる遺物が混ざる可能性は低く、全て住居跡に伴う遺物と考えられる。

出土した遺物で時期比定が可能なのは、まず、土師器坏（2）である。この坏は、北武蔵地域を中心に分布する土師器坏と同一の特徴を持つことから、当時のこの地域との交流を示す好例と言えよう。北武蔵における編年では、6世紀前半の年代を与えられている。土師器高坏（3）も、体部に外稜を持つことや6世紀後半には高坏の出土数が減少する傾向にあることを考え合わせると、（2）の坏とはほぼ同時期のものと思われる。黒色処理された土師器坏の破片も全くみられないことから、6世紀後葉になるとは考えにくい。ただし、土師器坏（1）や土師器甕（5）はやや新出の特徴を持つため、6世紀中葉の年代を考えたい。

また、1号竪穴住居跡で検出したいわゆる「間仕切り溝」は、近年の調査事例からその性格について、「間仕切り」ではなく床板を支えるための根太を据えた痕跡である可能性が示されており、本報告では「間仕切り溝」の呼称は避けている。

2号竪穴住居跡は出土遺物が礎のみであるため、時期の特定は困難である。しかし、近接する調査地点の成果や遺構の規模、1号竪穴住居跡とは主軸方位が異なることなどから、根拠には乏しいが6世紀後半～7世紀代のものと推測される。

3号住居跡も時期決定は難しい。住居跡を壊す攪乱中から出土した土師器坏（1・2）が、この住居跡に伴う遺物と考えられる。小片のため時期の特定は困難だが、その器形の特徴から6世紀代の遺物とは考えにくい。遺構の規模からみても、7世紀代の所産になるとと思われる。

土坑は検出した5基のうち、2号土坑及び3号土坑の2基が古墳時代のもと考えられる。両者とも覆土

が堅穴住居跡と類似し、また、2号土坑はその覆土の上層に旧河川跡の土が堆積していたことからの推測である。

溝は検出した3条のうち、重複関係から最も古い3号溝が古墳時代に属すると考えられる。出土遺物はないが、溝の角が1号堅穴住居跡とほぼ同一であることや、断面形態が逆台形でないなどが根拠としてあげられる。

このほか、厳密には遺構ではないが、旧河川跡もこの時期のものと考えられる。3号溝を壊していることや出土遺物に土師器坏(1)をはじめ黒色処理された土師器坏の破片が数点みられることなどから、少なくとも古墳時代後期には流路として存在していたと考えられる。

またビット群であるが、旧河道に沿うように分布しているように見えることから、旧河川跡と大きく時期がずれるとは考えにくく、大半のビットはこれとほぼ同時期のものと推測される。

中世～近世以降

検出した3条の溝のうち、1号溝と2号溝は覆土にしまりがなく、遺構の掘り込みも上層からであったため、この時期のものとして推測される。特に1号溝は水田等の地割り溝と考えられ、近年まで使用されていた可能性がある。

以上、今回の調査における成果を概観した。調査面積から考えると、堅穴住居跡3軒という検出数は少なく、遺構の分布は疎らにみえる。しかし、東側に隣接する地点の調査^{※2}では、多くの堅穴住居跡を検出しており、決して遺構密度は低くない。このことから、今回の調査で検出した旧河川跡が、集落の西側の境界として機能していた可能性も考えられる。周辺の調査事例の蓄積によって、より正確な検証ができるであろう。今後の調査に期待したい。

註

※1 調査中に事実確認できなかったが、砂田姥沼遺跡は田原面上の遺跡であることから、おそらくは七本桜・今市軽石と思われる。

※2 未刊行であるが、平成10年に(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターにより、7,000㎡の調査が行われ、古墳時代中期の堅穴住居跡7軒、古墳時代後期～平安時代の堅穴住居跡11軒などを検出している。また、平成19年に日本窯業史研究所が行った調査では、640㎡で古墳時代後期～平安時代の堅穴住居跡を約10軒検出している。

参考文献

- | | | |
|-------------|------|--|
| 大塚雅之・今平利幸ほか | 1991 | 『前田遺跡』宇都宮市教育委員会 |
| 津野 仁 | 1995 | 「栃木県における6・7世紀の土器極年と地域的特徴」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 |
| 初山孝行・塚原考一ほか | 1999 | 『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡(1区)』 |
| 藤田典夫・安藤美保 | 2000 | 『杉村・磯岡・磯岡北(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 池田敏宏 | 2001 | 「大開台遺跡出土土器の位置付けと集落の変遷」『大開台遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター |
| 橋本澄朗・藤田典夫ほか | 2001 | 『権現山・百目鬼遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター |
| 藤田直也・田代隆 | 2002 | 『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター |
| 勝見一品 | 2005 | 『磯岡北遺跡』宇都宮市教育委員会 |
| 内山敏行 | 2005 | 『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター |
| 土生朗治・越智敬ほか | 2007 | 『砂田姥沼遺跡』宇都宮市教育委員会 |

表2 遺構一覽表

1号竪穴住居跡	: 6世紀中葉	3号土坑	: (古墳時代)	3号溝	: (古墳時代後葉)
2号竪穴住居跡	: (7世紀代か)	4号土坑	: (縄文時代か)	旧河川跡	: 古墳時代後葉
3号竪穴住居跡	: 7世紀代か	5号土坑	: (縄文時代か)	ピット群	: (古墳時代か)
1号土坑	: (縄文時代か)	1号溝	: (近世以降)		
2号土坑	: (古墳時代(旧河川跡以前))	2号溝	: (中世〜近世以降)		()は履土などからの推定。

表3 出土遺物観察表

1号竪穴住居跡(S1001)

番号	器種	数量(mm)	調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坪	口径 151 器高 49	口縁部は内外面とも横ナゲ後ミガキ。体部から底部外面はヘラケズリ。体部から底部内面はナゲ後放射状のミガキ。内外面とも割縁が著しい。	細砂粒を少量。白色泥・赤褐色粒を少量含む。赤褐色。底部外面のみ黒褐色。焼成は良好。	2/5遺存 No.27,74一括
2	土師器 深	口径 130 器高 58	口縁部は横ナゲ。体部から底部外面はヘラケズリ。内面は横ナゲ。口縁部は内側方に溝取りを施す。	砂粒を中量。白色泥を微量含む。黄褐色。焼成は良好。	2/5遺存 No.13-15一括
3	土師器 高坪	口径(168) 器高(42)	内外面とも器底面が磨滅し、調査不明瞭。内面はナゲ後ミガキか。	砂粒を少量。赤褐色粒を少量含む。軟質な胎土。明赤褐色。焼成はやや不良。	坪部のみ2/5遺存 No.1,3,17,貯蔵六一括
4	土師器 蓋	最大径(183) 器高(73)	外面はヘラケズリ後斜位のミガキ。内面はヘラナゲ後ナゲ。	白色泥・細砂粒を少量。赤褐色を少量含む。桜褐色。焼成は良好。	体部のみ3/4遺存 No.16,19,18,21,30,56,59,貯蔵六一括
5	土師器 瓶	口径 215 器高 169 底径(56)	口縁部は横ナゲ。胴部上半はヘラナゲか。胴部下半はナゲ後放射状の弱いミガキ。内面は口縁部横ナゲ後一部斜位のミガキ。胴部はナゲ後放射状のミガキ。内面黒色染。底部は平孔か。	白色泥・砂粒を少量。白色泥を微量含む。胎土はやや軟質。外面淡褐色。内面黒褐色。焼成はやや不良。	底部を欠損。 No.20,23,24,28,38,40,42,50,51,60,62,68
6	土師器 甕	器高(242) 底径 74	外面はナゲ後斜位のミガキ。胴部下半は横位ヘラケズリ後ナゲ。内面はナゲ。	砂粒を中量。白色泥を少量含む。外面暗褐色。内面淡褐色。外面の一部にスズ付。焼成は良好。	胴部から底部を1/2 No.29,27,35,31,36,41,49,55,64,69,72,貯蔵六一括

2号竪穴住居跡(S1002)

番号	器種	数量(mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	石器 磁器石	長さ113mm、幅54mm、厚さ46mm、直さ434.34g。			胴部破損 No.1
2	石器 磁器石	長さ103mm、幅55mm、厚さ29mm、直さ273.43g。			完形 No.2
3	石器 磁器石	長さ94mm、幅45mm、厚さ27mm、直さ165.18g。			完形 No.3
4	石器 磁器石	長さ103mm、幅45mm、厚さ22mm、直さ153.81g。			完形 No.4

3号竪穴住居跡(S1003)

番号	器種	数量(mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坪	器高(21)	口縁部は内外面とも横ナゲ。輪積み底を残す。	細砂粒・赤褐色粒を微量含む。緻密な胎土。淡褐色。焼成は良好。	口縁部破片 SK004一括
2	土師器 坪	器高(25)	口縁部は横ナゲ。体部から底部外面はヘラケズリ。内面はナゲ。	砂粒・白色泥を中量含む。明赤褐色。焼成は良好。	口縁部破片 SK004一括

旧河川跡出土遺物

番号	器種	数量(mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 坪	口径(117) 器高(39)	口縁部は横ナゲ。体部から底部外面はヘラケズリ。内面はナゲ。内外面とも黒色染(磨上上げ)。	細砂粒・赤褐色粒を少量。白色泥を少量含む。緻密な胎土。淡褐色。焼成は良好。	1/5遺存 SD001一括
2	土師器 坪	口径(12)	外面はヘラケズリ。内面はナゲ。	砂粒を中量。白色泥を少量含む。赤褐色。焼成は良好。	底部破片 SD001一括
3	土師器 甕	器高(79)	口縁部は内外面とも横ナゲ。胴部外面は斜位のヘラケズリ。内面はナゲ。	砂粒を多量。白色泥を少量含む。外面暗褐色。内面淡褐色。焼成は良好。	口縁部・胴部破片 SD001No.12
4	土師器 甕 底径 61	器高(223)	内外面ともナゲ。	角閃石を多量。白色泥・砂粒を少量含む。外面淡褐色・暗灰色。内面暗褐色。焼成は良好。	底部破片 SD001一括
6	新石器 横板	-	外面はタタキ整形後、カキ目。内面は同心円状の当て具痕が残る。	白色泥を中量。砂粒・赤褐色粒を微量含む。暗灰色。焼成は良好。	胴部破片(磨滅不明) SD001一括

遺構外出土遺物

番号	器種	数量(mm)	調査の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	新石器 刀	-	外面は棒子状のタタキ整形。内面は同心円状の当て具痕が残る。	白色泥・白色の角閃石を少量。赤褐色を少量含む。灰色。焼成は良好で硬質。	胴部破片(磨滅不明) A区遺構
2	石器 有角 尖頭器	長さ69.2mm、幅16.8mm、厚さ7.1mm、重さ9.41g。石材は頁岩。			完形 B区側木痕

※計量値の計測値に付した()は復元値。()は遺存値を示す。

表4 ビット計測表

番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
001	1A91	22	20	21	ビット群①	057	1A42	22	20	10	ビット群③
002	1A81	18	18	4	ビット群①	058	1A42	38	35	10	ビット群③
003	1A81	24	24	13	ビット群①	059	1A42	30	28	9	ビット群③
004	1A81	26	24	12	ビット群①	060	1A42	—	31	12	ビット群③
005	1A81	13	12	7	ビット群①	061	1A42	18	16	4	ビット群③
006	1A81	16	14	10	ビット群①	062	1A42	20	17	12	ビット群③
007	1A81	18	16	16	ビット群①	063	1A42	32	25	14	ビット群③
008	1A81	18	15	7	ビット群①	064	1A42	24	22	4	ビット群③
009	1A81	16	14	6	ビット群①	065	1A42	20	18	2	ビット群③
010	1A81	46	40	7	ビット群①	066	1A42	36	22	23	ビット群③
011	1A81	28	22	16	ビット群①	067	1A42	34	32	10	ビット群③
012	1A81	30	29	21	ビット群①	068	1A42	22	19	12	ビット群③
013	1A81	16	12	13	ビット群①	069	1A42	26	23	8	ビット群③
014	1A81	26	26	11	ビット群①	070	1A42	22	22	25	ビット群③
015	1A82	26	23	21	ビット群①	071	1A42	18	16	7	ビット群③
016	1A82	18	17	19	ビット群①	072	1A42	29	24	19	ビット群③
017	1A92	46	36	36		073	1A42	28	18	16	ビット群③
018	1A93	70	52	29		074	1A43	22	18	13	ビット群③
019	1A93	20	20	16		075	1A43	20	18	17	ビット群③
020	1A83	22	20	15		076	1A43	20	18	6	ビット群③
021	1A83	46	38	36		077	1A43	32	32	19	ビット群③
022	1A80	20	19	10		078	1A43	24	23	29	ビット群③
023	1A50	—	45	9		079	1A43	24	24	14	ビット群④
024	1A40	24	24	8		080	1A34	23	23	13	ビット群④
025	1A60	30	30	14	ビット群②	081	1A34	23	22	11	ビット群④
026	1A60	20	20	11	ビット群②	082	1A34	30	29	12	ビット群④
027	1A60	38	34	17	ビット群②	083	1A34	16	14	4	ビット群④
028	1A61	27	25	28	ビット群②	084	1A34	15	14	16	ビット群④
029	1A61	—	26	27	ビット群②	085	1A44	22	22	18	ビット群④
030	1A61	30	28	21	ビット群②	086	1A34	18	17	20	ビット群④
031	1A61	20	18	14	ビット群②	087	1A34	42	42	23	ビット群④
032	1A61	32	24	16	ビット群②	088	1A34	20	18	22	ビット群④
033	1A61	28	24	30	ビット群②	089	1A34	24	23	22	ビット群④
034	1A61	24	22	20	ビット群②	090	1A35	27	24	17	
035	1A61	20	18	27	ビット群②	091	1A11	30	28	14	
036	1A61	24	24	24	ビット群②	092	1A22	18	18	9	
037	1A61	24	22	14	ビット群②	093	1A12	24	23	16	
038	1A51	18	16	12	ビット群②	094	1A02	40	30	17	
039	1A51	32	30	24	ビット群②	095	1A03	34	32	13	
040	1A51	16	16	28	ビット群②	096	1A23	28	26	30	ビット群⑤
041	1A51	28	27	29	ビット群②	097	1A13	40	39	29	ビット群⑤
042	1A51	20	18	20	ビット群②	098	1A24	26	23	16	ビット群⑤
043	1A51	20	18	20	ビット群②	099	1A14	32	28	17	ビット群⑤
044	1A51	34	30	19	ビット群②	100	1A14	42	40	19	ビット群⑤
045	1A61	17	16	16	ビット群②	101	1A14	40	39	24	ビット群⑤
046	1A61	18	17	16	ビット群②	102	1A14	23	23	25	ビット群⑤
047	1A61	18	16	21	ビット群②	103	1A14	38	37	11	ビット群⑤
048	1A61	28	23	26	ビット群②	104	1A15	38	34	1	ビット群⑤
049	1A61	22	22	16	ビット群②	105	1A15	20	20	12	ビット群⑤
050	1A62	25	22	24	ビット群②	106	1A15	26	23	17	ビット群⑤
051	1A62	22	21	19	ビット群②	107	1A25	15	14	16	ビット群⑤
052	1A52	22	18	21	ビット群②	108	1A25	34	32	14	ビット群⑤
053	1A52	60	60	25	ビット群②	109	1A24	30	28	10	ビット群⑤
054	1A63	58	—	10		110	1A24	30	30	11	ビット群⑤
055	1A64	62	58	19		111	1A24	21	20	36	ビット群⑤
056	1A42	18	16	11	ビット群③						

写真図版



調査区A区全景 (南から)



調査区A区全景 (上空から)



1号竪穴住居跡南側遺物出土状況(南東から)



1号竪穴住居跡貯蔵穴(東から)



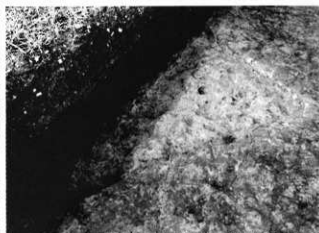
1号竪穴住居跡南側完掘(東から)



1号竪穴住居跡北側完掘(北西から)



1号竪穴住居跡掘り方検出状況(南東から)



1号竪穴住居跡北側掘り方検出状況(東から)



2号竪穴住居跡完掘(北東から)



2号竪穴住居跡完掘(南東から)



3号壁穴住居跡土層堆積状況(南から)



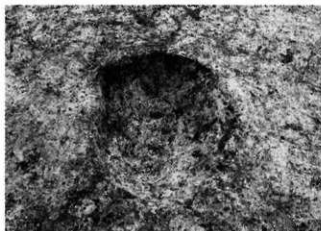
1号土坑完掘(東から)



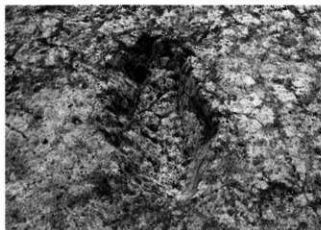
2号土坑完掘(北から)



3号土坑完掘(東から)



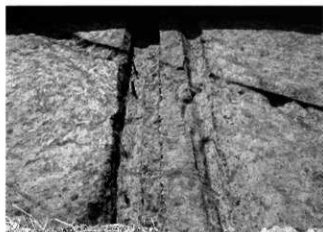
4号土坑完掘(北東から)



5号土坑完掘(東から)



1号溝完掘(東から)



1号溝木杭検出状況(西から)



1号溝土層堆積状況(東から)



2号溝完掘(北から)



2号溝完掘(南から)



2号溝完掘(北東から)



3号溝完掘(南西から)



旧河川跡完掘(北東から)



旧河川跡完掘(南から)



旧河川跡北端部完掘(北西から)



B区旧河川跡完掘(北から)



ビット群③完掘(南から)



調査区B区全景(北西から)



作業風景(遺構確認作業)



調査前風景(南西から)



SI001-1内面



SI001-2



SI001-1



SI001-3



SI001-4



SI001-5



SI001-6



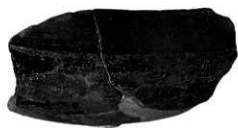
SI001-5内面



SI002



SI003



旧河川跡-1



旧河川跡-2



旧河川跡-3



旧河川跡-4



旧河川跡-5



遺構外-1



遺構外-2

報告書抄録

ふりがな	すなたうばぬまいせき								
書名	砂田姥沼遺跡 (CE)								
副書名									
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第62集								
編著者名	白崎 智隆・岩崎 祥								
編集機関	埋蔵文化財発掘調査支援共同組合 (埋文協)								
所在地	〒169-0073 東京都新宿区百人町1-20-24 TEL03-3365-2277								
発行年月日	2008年1月11日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
砂田姥沼遺跡	東谷・中島土地区画整 備事業地51街区2画地	09201	4356	36° 29' 29"	139° 54' 56"	2007.07.21 ～ 2007.08.23	1,350㎡	土地区画整理	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
砂田姥沼遺跡	包蔵地	縄文時代草創期	なし		有舌尖頭器		古墳時代後期の竪穴住居跡3軒及び旧河川跡等を検出した。遺構の分布は疎らであり、集落の縁辺部であることを窺わせる。また、遺構は検出していないが、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土しており、注意を要する。		
	集落	古墳時代後期	竪穴住居跡	3軒	土師器, 須恵器,				
		中世・近世以降及び時期不明	土坑	2基	縄物石				
			溝跡	1条					
			土坑	3基					
			溝跡	2条					
			ピット	111基					

判 型 : A4判
頁 数 : 37頁
本文組版 : 14級(10p)明朝を基本
図版製版 : 400dpi.175線2色
図版印刷色 : 墨+DIC 550
印刷方式 : オフセット印刷
用 紙 : 表紙 特種製紙レザック66ぞうげ菊判 連量121.5kg
本文 日本板紙淡クリーム琥珀A判 連量57.5kg
図版 王子製紙サテン金藤N菊判 連量76.5kg

©2008 Maibunkyou

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第62集

砂田姥沼遺跡(C区)

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年1月11日 発行

編 集	埋蔵文化財発掘調査支援共同組合(埋文協) 〒169-0073 東京都新宿区百人町1-20-24	Tn.03-3365-2277
発 行	宇都宮市教育委員会 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5	Tn.028-632-2764
印刷・製本	株式会社 内田印刷所 〒400-0032 山梨県甲府市中央2-10-18	Tn.055-233-0188

埋蔵文化財発掘調査支援共同組合(埋文協) <http://www.maibun.jp/>